また外航、内航船共に数多くの船舶が、玄関門に取引していると共に、四国の南北と連絡とするために二方面に出港することや、東南アジア方面に向うために佐伯が好位置に在ることが今更ながら理解できる。

なお次にかゝげる取扱品目実績や、内航運送業実績を合せて見ると、その動向が一層明瞭となってくる。

（第一表）

内航運送取扱実績

5.41　九州海運局佐伯出張所管内

	t
木材	160.592
紙	37.492
セメント	54.068
石灰石	957.993
鉱石	215.466
鋼材	1.726
薪炭	48.592
肥料	41.585
硅砂	76.685
砂利	152.359
ベニヤ板	1.050
石炭	62.835
分蜜糖	13.491
石油製品	5.213

（調査　豊南高二年三組高橋）

（第二表）

内航船舶運送取扱実績表

5.42　（九州海運局佐伯出張所管内）

運送業者＼月	2月	6月	12月
	t	t	t
佐伯船運	4.215	2.130	5.052
大分海陸	934	—	—
日通	6.594	8.084	16.644
松井回漕店	1.132	1.150	1.400
村本組	101.590	151.838	138.652
堀川回漕店	1.073	540	700
興国運送	44.502	35.431	44.417

（豊南高2H3　日高信子調）

（本項おわり）

報告

徳川秘宝展の見学と霊山登山

会員　小野英治

去る四月十二日（日曜日）、この日は大分市で開催中の徳川美術館秘宝展の最終日であり、かつ、大分県地方史研究会と大分探勝アルコウ会の主催する〝講演（霊山の歴史と文化）と登山（霊山）〟の当日でもあったから、愛妻をともなって単独参加をすることにした。

徳川美術展の方は、すでに先週佐伯史談会では見学を実施していたが、当日私は家事の都合から、心ならずも参加出来なかったのである。

最終日で日曜日ともあって、徳川美術展は大変な混雑ぶりで、コーナーが一番人気があり、一かたまりに集中して動かない。武具、調度品、茶器、衣類、書画等珍らしいものが多い。七名家（徳川一門中の大々名、尾張徳川家）の道具を知る上で参考になる点が多い。特に鑑賞する上で、色紙に書いてある説明（解説）がよい。然るにいえば一部でなく、展示品の全部に、解説文を附せば、より興味深く鑑賞出来たのではなかったろうか。又尾張徳川家と云えば、名古屋城に金のシャチホコであろう。この資料が欲しいところであった。そして有名な源氏物語絵巻も、この不満を解消するためには、やはり名古屋へ行かねばならぬということであろう。

午後霊山へ向こう。霊山は海抜五九六米、大分市の南東部に位するなだらかな山である。現在大分市が森林公園として開発中で、自動車道も山の殆ど七・八合目まで、霊山寺まで完成しており、遊歩道も完備していて、ここ十年の眺望は素晴らしい。この日は花曇りとなってはま

り遠望はきかぬが、よく晴れた日は海をへだてて四国地方が指呼のうちに望まれるという。

交通混雑のため霊山寺へ到着したのは一時過ぎで、立川先生の講演が本堂ですでに始まっていた。このような貴講演を拝聴するのは、私にとって初めての経験であった。諸先生方はさすがに話上手である。四時過ぎまで休みなしに、入れかわり、それぞれ専門分野からお話し下さるのであるが、あかせないから不思議である。

私が特に興味深く拝聴したのは、渡辺先生の霊山寺に関する古文書〝建武四年地頭植田大夫坊にあてた下し文〟を中心とした、中世に於ける社会情勢、郷土に於ける南北朝合戦であった。やはり古文書を見て、中世人物語を、大分平野を一望のもとにする地で聴けば、生きた歴史と知る思いで、その趣きはかくべつである。十数年前当地を訪れた渡辺博士は、この寺に泊り、当時の景観の非大さ、夜景の幽厳さにふれて大いに感動したという。

「大宰管内志」には

○飛来ノ霊山寺、〈豊鐘善鳴録五巻〉に、按那伽ハ天竺ノ人也、推古帝ノ季年遥踰二支那一、顕光日本一、望二豊後植田山一、愕然嘆曰、奇哉此山、恰似二西域一、鷲峯小巔一、蓋非二彼一乎飛来此邦乎。先此植田二有二大神祠一、郡ノ豪酋也。一日畋猟登山薙蓁倘徉、見二一處赫発異光一、即往検之方得二十一面大悲像一、歓喜踊躍乃擬二草堂一奉安焉。逮二平那伽卓一錫帰倫二僧事一、創立伽藍一、名曰二飛来山霊山寺一。以二其肖二聖境一也伽寓レ山数十稔とあり此寺の事いまだ舊蹟を考へず、僧〈神洞云〉植田郷ノ上のつめに飛来山霊山寺とあり倩教大師開基の寺にして天台宗なり、当国にては大寺にて名高き寺なり。古は坊舎数区有しと云。今は一寺のみなり。本堂は銅葺にして辰巳ノ方に向へり山八分目計りにあり二王門鐘楼門鎮守堂など有り。

と記している。なんでも天正十四年豊薩戦の戦火を受け衰微していたのを、元和九年当時豊後に配流中の松平忠直が崇敬するところとなり諸堂を再建、今日に至っているといわれる。

最近の観光案内書にはこの霊山はない。しかしすぐれた古くて新しい観光地としてクローズアップされるだろう。

講演会終了後、立川先生にあいさつもそこそこに、三十分余山上より八幡望を一人楽しんだ。渡辺先生のお話き思い返しながら、思いは南北朝の昔をはせていた。

（おわり）

（編集者附記）本文に述べられた通り、史談会としては四月廿日の日曜に「霊山秘宝展」の見学会を催し、午後立川先生の御案内で移転八幡・霊山を訪い古跡をめぐった。参加者十五名。

マイクロバスに乗って先ず大字町に新しく出来たザビエルの像を観、春日神社から芝居小屋を経て移転八幡に参拝する。

樹令千　年と伝えられる大樟を仰ぎ、老樹立ち並ぶ神域にこの神社の歴史と古さとをここに守られた時代の雄勇な農民の信仰を思った。

八幡造りの壮麗な社殿を仰ぎ、拝殿に上って拝礼し、立川先生の御世話で御宝殿の古文書・絵巻を拝観した。

境内を後にしたマイクロバスは江戸帳原に向う。ここは江戸時代の末、府内藩によって開拓、わが佐伯領上浦方面の農民が多数入植したところという。京都の中央、樹林の中にある開拓の主宰者広瀬久兵衛の墓があった。

南陽廣瀬翁之墓　明治四歳辛未七月廿九日卒寿八十二

とある。起伏は多いがあたりは高原状のよく拓かれた農村である。

賀来に出て先ず千代松古墳を、そして丑殿古墳を見学、更に高瀬石仏を訪ねる。いずれも国や県から指定保護されている文化財。

そうして、そこから新らしく出来た霊山の登山道を車はのぼって、霊山寺の前につく。私は今から四十数年前一度遠足に来たことがあるが、当時の記憶はほとんどない。松平頎公が寄進したという山門の大きな仁王像と大屋根のいたんだ本堂が印象にのこる。新たに出来た公園からの大分市の展望はまことに素晴らしいもの。よい一日であった。

（羽柴）